

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653235

研究課題名(和文) 地域づくりにおけるコミュニティ・キャパシティ評価指標の開発に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical Research on the Development of Assessment Tool in the Community Capacity Building

研究代表者

高橋 満 (TAKAHASHI, MITSURU)

東北大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：70171527

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、コミュニティ・キャパシティをアセスメントする指標開発を行うことにある。

開発した計画・評価ツールは、(1)『市民参加でつくる計画・評価ツール：ロジック・モデル』(2013年)及び(2)「地域力を高める実践のための計画・評価ツール」(2013年)の2つである。どちらも、参画型の評価手法の開発という視点を重視した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to develop indicator for assessment of community capacity building. Tools of planning and assessment developed are; "Planning and Assessment Tool: The Logic Model Guidebook", 2013, and "The Planning and Assessment Tool for Community Capacity Building", 2013. In these both tools, I take participatory approach of planning and assessment.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：社会教育

キーワード：コミュニティ・キャパシティ 地域づくり 計画・評価 社会教育

## 1. 研究開始当初の背景

このコミュニティ・キャパシティ・デベロップメント(以下、CD という)という概念は、1990年代に入り途上国に対する**国際的な援助の理念・戦略として** UNDP により提案されたものである。UNDP は、CD を、「個人、組織、諸機関、社会が機能を果たし、諸課題を解決し、目標を設定したり、それを達成する能力を発展させる過程である」(UNDP 1997)と規定している。社会教育実践や社会福祉実践の視点から重要なのは、それが、(1)継続的な学習と変化のプロセスであること、(2)地域社会に既に存在する個人や組織のよりよい活用とエンパワーメントを重視していること、(3)実践戦略やプログラムをつくる際に、より体系的なアプローチをする必要性があることを指摘している点である。**アセスメント指標の開発は、その意味で、地域づくりの実践を計画的にすすめる上での、体系的なアプローチの基礎である。**にもかかわらず、この実践的な課題に挑戦する研究はほとんどみられない。

この CD は様々な国の援助機関の援助戦略として採用されているだけでなく、**先進国の都市開発や農山村開発・再生論**の試みのなかでも活かされている(Chaskin 2001)。日本では、鶴見和子や宮本憲一などの内発的発展論とも通底する考え方である。しかし、とくに日本の研究では、地域発展をどのように図るのか、そのために CD という概念をどのように実践に活かしていくのか、という実践的な問題関心が希薄である。CD では、さまざまな領域の実践を統合的に評価することが大切であるが、これを統合化しようという研究はみられない。申請者は、これまで、この CD という概念を使い地域づくりの視点を提示してきた(高橋 2003)。加えて、社会福祉領域でも「地域住民連携による認知症・介護予防サービス企画支援に関する研究」の協同研究者として地域づくりにおけるソ-

シャルキャピタルの意義について検討をすすめてきた(高橋 2010)。そのなかで施設職員が実践に取り組む指標づくりに対する強い要望がだされている。

コミュニティ・キャパシティに関する内外の先行研究の検討、他領域の研究成果を踏まえ、**教育と福祉領域の実践に資する指標づくり**をすすめる必要がある。

## 2. 研究の目的

地域社会は、社会教育、健康、社会福祉をめぐり実践の基盤として重要である。本研究の目的は、これらの専門諸機関の実践の質を高めるために不可欠な**コミュニティ・キャパシティをアセスメントする指標開発**を行うことにある。国際開発計画(UNDP)や World Bank など国際機関では、途上国の社会開発、先進国の都市貧困地域の再開発、農山村開発の手法として、community capacity development という考え方を採用している。日本では、JICA が途上国支援のコンセプトとして活用している。アセスメントの指標もいくつか提案されている。しかし、これらは大規模な地域経済再開発を対象とするものであり、教育や福祉の実践から求められる、より小規模な、小学校区や町内会レベルでのキャパシティをアセスメントするという実践的課題とは乖離が存在する。本研究では、それぞれ教育と福祉のサービスを地域レベルで提供している諸機関(公民館、地域包括支援センターなど)の実践に資する指標開発とその試行的活用・評価を行う。

## 3. 研究の方法

申請者は、すでにいくつかの研究書と論考をまとめている。拙著『社会教育の現代的実践』(創風社、2003年)、『NPOの公共性と生涯学習のガバナンス』(東信堂、2009年)、「地域連携を促進するソーシャルキャピタルの視点」(『厚生労働省 平成21年老人保

健康増進等事業』、認知症介護研究・研修  
仙台センター、5 - 34 頁)、『地域をつくる学  
び～教育と福祉とを結ぶ実践』(東北大学、  
2010 年)、「福祉コミュニティづくりと公民  
館の存立関係」(『東北大学大学院教育学研究  
科年報』第 59 集第 1 号、掲載決定・印刷中、  
2010 年)などで、社会教育、社会福祉とを  
結ぶ地域づくりにおけるソーシャルキャピ  
タルの意義や CD の理論等を検討紹介してい  
る。

これまでの研究を踏まえつつ、新たに内外  
の先行研究、とくに欧米諸国の都市・農村再  
開発における実践のプロセスとアセスメン  
トの指標などについての知見を整理し、暫定  
的なアセスメント指標の作成を試みる。

本研究は、全体として 3 年の研究期間を想  
定している。まず、(1) CD の概念の内外の  
研究動向を検討する。とくに、国際的な研究、  
及び援助機関が作成した評価指標の検討を  
すすめ、暫定的な指標を作成する(平成 23  
年度)、(2) 暫定指標を活用して、地域のキ  
ャパシティのアセスメントを試行的に行う  
とともに、その有効性を検証するために次年  
度に向けての CD 実践計画を作成(一部実施)  
する(平成 23・24 年度)、(3) CD の実践  
を公民館、社会福祉協議会、社会福祉施設、  
地域包括センターで試行的に実施して、その  
事業の評価を、アセスメント指標を活用して  
行う(平成 24・25 年度)、(4) アセスメン  
ト指標の有効性を検証して、必要な修正を加  
えて、社会教育、社会福祉領域のキャパシ  
ティ・アセスメント指標を完成させる。

#### 4. 研究成果

本研究の目的は、コミュニティ・キャパシ  
ティをアセスメントする指標開発を行うこ  
とにあった。開発した計画・評価ツールは、  
(1)『市民参加でつくる計画・評価ツール：  
ロジック・モデル』(2013 年)及び(2)「地  
域力を高める実践のための計画・評価ツ

ル」(2013 年)の 2 つである。どちらも、参  
画型の評価手法の開発という視点を重視し  
た。

この研究は、実践的な指向を強くもつ。開  
発された指標は、社会教育領域では公民館、  
社会福祉領域では地域包括支援センターが、  
それぞれの目的を実現するために取り組む  
コミュニティ・キャパシティを高める実践の  
つくる事業に活かされ、そこで有効性が検証  
されることになる。これによって、短期の事  
業を、より中長期の地域づくりの課題のなか  
に位置づけつつ実践を行い、かつ評価するこ  
とが可能となる。つまり、中長期の計画と個  
別事業の乖離を克服することにより、これま  
で実践の目的や課題の位置づけを大きく変  
えることになる。

この指標は、社会教育や社会福祉だけでは  
なく、地域を基盤として展開されるさまざま  
な領域、例えば、学校と地域とのつながりを  
どうつくるのか、という実践。住民参加で健  
康づくりの活動をすすめる実践をどうつく  
るのかということを考える際にも有効な装  
置となろう。つまり、より広い領域で活用で  
きる指標となることが期待できる。

なお、評価ツールは、以下のような内容で  
ある。

自助・互助・共助が支える福祉コミュニティ  
をつくる～地域力を高める実践のための  
計画・評価ツール～

##### (1) このツールの使い方

このツールは、コミュニティ・キャパシ  
ティを高める実践の計画づくりと評価を支  
援するためのツールです。コミュニティ・キ  
ャパシティとは、地域社会における諸問題を自  
分たちの力で主体的に解決する能力と関係  
しており、途上国の地域開発に対する国際的  
支援の枠組みとして使われています。また、  
先進国でも保健・衛生の領域、社会福祉や  
教育の領域でも注目されている実践の枠組み  
です。ひとまず、このキャパシティを育むこ  
とを「地域力を高める実践」と表現しておき

ます。

コミュニティ・キャパシティは、これらの領域の実践の手段であり、かつ、目的でもあります。つまり、キャパシティを育むことによって、社会福祉のサービスの質を高めたり、福祉実践をより効果的にするだけでなく、この取り組みをとおして、プロジェクトが終了しても地域社会の福祉的諸課題を解決する力を高めることが目指されます。

このツールは、このコミュニティ・キャパシティを高めようとするあなたたちの実践が、いま、どこにいるのか、どこへ行こうとしているのか、ということのスナップショットを提供します。旅にたとえると、プロジェクトの旅がどのようにすすんでいるのか、あなたたちの実践を跡づけ、評価します。目標に対して、「出発点」にまだ留まっているのか、「歩み始めた」のか、「近くまで来た」のか、「到着」したのか、という4つのポイントをマッピングします。これによって、現在のキャパシティの諸側面をめぐり弱みと強さを確認することができます。プロジェクトの実践の計画づくりや、評価に役立つことを期待しています。

このツールは、参画型の評価の考え方に当たっています。参画型のワークショップを開催してプロジェクトに参加している人たちと一緒に議論しながら使うことが大切です。どうか、グループで議論しながらこのツールを使ってください。

## (2) コミュニティ・キャパシティを育むとは

このツールでは、コミュニティ・キャパシティを9つの側面から見ています。キャパシティを育むとは、この各側面でバランスよく旅の歩みをすすめることです。各側面に関連した設問に、みなさん方、プロジェクト・グループで議論しながら答えるようにつくられています。

このツールの9つの側面とは以下のものです。

参加  
リーダーシップ  
コミュニティ構造  
外部の支援の役割  
批判的検討  
資源を得ること  
スキル、知識、学習  
他の個人や組織との結びつき  
コミュニティ意識

それぞれの側面の設問の冒頭には、検討すべき側面についての説明があります。

## (3) ツールを使うステップ

**ステップ1:** はじめに読んでください。

設問に答え始める前に、最初にある各側面の囲みの定義をよく読んでください。

**ステップ2:** 話し合ってください。

このプロジェクトの参加したメンバーの人たちが参加して、ワークショップなどの形で各設問に対する答えを皆さんで話し合ってください。

**ステップ3:** 設問にそって、もっとも適切な選択肢にをつけてください。

あなたのプロジェクトにもっと適切な選択肢どれかを決めてください。もし、設問の内容が、あなた方のプロジェクトには合わないようでしたら、無理にをつけしないで「D.N. わからない」と欄に記入してください。

**ステップ4:** 9つの側面全体の回答を要約するために、結果をspider webの欄を使ってまとめてください。

これは、プロジェクトの各側面について、あなたたちのプロジェクトがどこにいるのかについてのスナップショットを提供します。グラフに各側面の到達点を表示することによって、あなたたちのプロジェクト・チームが、どの側面に今後力を注ぐべきかがわかると思います。

**ステップ5:** 現実的であってください。

例えば、参加のためのキャパシティの形成

は、すべてのコミュニティで異なるものです。プロジェクトは、つねに直線的にすすむわけではありません。それは堂々巡りになるかもしれません。できるだけ、いつも現実的に、あなたたちの「旅」を助けるものとして、計画・評価ツールを使ってください。

以下、キャパシティの9つの側面にしながら、評価項目がつけられている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

小形美樹・高橋保幸・高橋満「天災地変直後の職業訓練の意義と役割 東日本大震災で被災した女性求職者の事例から」、仙台青葉学院短期大学『研究紀要 Seiyō』第5巻、第2号、査読有、2014年3月、57-71頁。

高橋満「生涯学習のガバナンスとNPOの役割」東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報(14)、査読無、2014年3月、1-10頁。

渡邊祐子・高橋満「美術館経験と意味の構成」東北大学大学院教育学研究科年報、62巻1号、査読無、2013年12月、89-113頁。

高橋満「福祉のまちづくりと『合意』の形成：学びのコミュニティをつくる」『認知症ケア事例ジャーナル』第6巻第3号、依頼論文、査読無、2013年12月、298-308頁。

高橋満「公民館職員の専門性とは何か 研修編成の構想」『月刊社会教育』、査読有、2013年3月、10-22頁。

[学会発表](計 3 件)

高橋満・姜大仲「NPOのガバナンスと生涯学習の役割」第5回日韓学術交流研究大会、韓国、2013年10月18日。

高橋満・渡邊祐子「博物館経験と意味の構成」日本社会教育学会、研究大会(東京学芸大学)、2013年9月28日。

高橋満「だれがボランティアに参加しているのか - 学ぶことの意義」日本社

会教育学会、東京6月研究集会(筑波大学)、2013年6月8日。

[図書](計 3 件)

高橋満・槇石多希子「震災とアート教育の可能性」日本社会教育学会編『60周年記念 希望をつくる社会教育』東洋館出版、155-172頁、2013年。

高橋満「『労働の場の学習』研究の視角」日本社会教育学会編『労働の場のエンパワメント』東洋館出版、32-43頁、2013年。

高橋満『コミュニティワークの教育的実践 教育と福祉とを結ぶ』東信堂、全202頁、2013年。

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

東北大学・教育学研究科・教授  
高橋 満 (TAKAHASHI, Mitsuru)  
研究者番号：70171527

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：